

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

演技について、ひとかどのことを語る人はたくさんいるだろう。だが、演技について語ることが、人間存在の本質を発見する絶えざる行為として自覚化されている人は少ないように思う。演技とは、語られることを拒否するように成立している。それは、語るものではなく、生きるものだ。不用意な精神が、すぐさま可視的に想い浮かべるように、演技とはある形とか、意味伝達の道具として空虚な空間のうちを浮遊しているものではない。いわんや、空間のうちに分散し、非人格化され、断片的にギョウコした心でもない。動きとのあいだに充分に規定された関係をもっている空間のなかで、ある個人が、^ア彼自身と出会うための不可避なる営為として行なわれるものである。俳優にとつて、そのように生きる場、それを彼自身は世界と名づけてもさしつかえないだろう。そういった性質をもった演技を語って、自己を貫いて遠く人間の真実をあやまたず射抜くとは、未知の世界への投企にちがいない。演技とは、感覚的なプレロジカルな領域として、透明な全体性の相貌のもとにあるものである。そういう前言語的領域を透視して、何ごとか語らなければならぬ必然性を内部に所有するとは、やはり語る主体が、既成の言語体験の拘束を逃れて、新しい言語領域のなかを生きたいという希求をもつということに等しい。^イそういう緊張を言葉が獲得したとき、語ることを拒否するひとつの世界が、発見として我々の面前に初めてケンゲンする。わたしの知識はごく貧しいものだが、今まで目にした演技に対する見解のなかで、プレロジカルな領域と、ロジカルな領域とのほさまを旋回しながら、あやういキンコウの上に、演技についての言語世界を形成しているように思えたのは、世阿弥の『花鏡』の一節であった。

舞に「目前、心後」といふことあり。目を前に見て、心を後に置けとなり。これは、以前申しつる舞智風体の用心なり。見所より見るところの風姿は、わが離見なり。しかれば、わが眼の見るところは、我見なり。離見の見にはあらず。離見の見にて見るところは、すなはち見所同心の見なり。そのときは、わが姿を見得するなり。わが姿を見得すれば、左右・前後を見るなり。しかれども、目前・左右までをば見れども、後姿をば未だ知らぬか。後姿おぼえねば、姿の俗なる所を知らず。さるほどに、離見の見にて、見所同見となりて、不及目の身所まで見智して、五体相応の幽姿をなすべし。これすなはち、心を後に置くにてあらずや。

今から五百年も以前に、演技に対するこのような見解があったというのは、ただただ驚くばかりである。ここに選ばれ、定着されている言葉は、今でも新しい。私はこの一文を読むたびに、世阿弥が、人間は身体をもつだけで疎外されているということ、そういう疎外のもとで、自身自身を不断に創造していく人間的行為が舞台空間のなかのみ、純粹に結実していくという鋭い直観を所有していたと感ずるのである。舞台上の人間のある意識に、こういう言葉の与え方をしたということ自体が、私には、見たこともない世阿弥の俳優、演出家としての確かさを保証してあますところがないと思われる。能勢朝次氏によれば、^ニ離見^ミという言葉は造語と考えてよいそうである。そして「世阿弥は離見の如くにして養うかには触れていないが、他より考えてみると、見所の批判をケンキョな心をもって受け入れ、師について批点の指摘を受けることである」と述べている。能勢氏のいうように、^三離見の見^ミとは「如何にして養うか」という次元のものであるまい。我見とか離見とかは、意識の機能の仕方のことであって、演技というものが絶対的独自性を主張するような自己意識によって行なわれるものではなく、^ウ他人知覚を前提としつ

つ、自己に対する想像的意識に支えられていくという弁証法的なダイナミズムのなかでしか捉えられない、ということの世阿弥的表現であろう。彼の中心概念である「花」にしてもそうだが、彼の論がすぐれていると思えるゆえんは、演技を俳優の行為と、それに臨場する観客の行為と、ふたつの項をもちながらもたえずひとつの全体性としてしか働かない関係のなかで考えようとする一貫性にある。

〔注〕○舞智風体・舞い方の一種。○見所・観客。

問一 「彼自身と出会うための不可避なる営為」（傍線部ア）とは、どういうことか、わかりやすく説明せよ。〔解答欄13.5cm×2行〕

問二 「そういう緊張を言葉が獲得したとき」（傍線部イ）とあるが、それは言葉のどのようなあり方をしているか、わかりやすく説明せよ。〔解答欄13.5cm×2行〕

問三 「他人知覚を前提としつつ、自己に対する想像的意識に支えられていく」（傍線部ウ）とは、どういうことか、わかりやすく説明せよ。〔解答欄13.5cm×2行〕

問四 傍線部a・b・c・dのカタカナに相当する漢字を楷書で記せ。

aギョウコ bケンゲン cキンコウ dケンキョ

出典：鈴木忠志『鈴木忠志演劇論集 内角の和』